

「水野三郎さんのこと」 神奈川県立藤沢養護学校 教諭 星野英俊（2013年6月校内新聞に寄稿）

夏が近づき、藤養の職員玄関に今年もまた金魚ねぶたの山車が展示されました。この金魚ねぶたを久しぶりに目にした時、私はあらためて水野さんはもういないのだという喪失感で胸がいっぱいになり、一瞬その場に立ちすくんでしまいました。昨年の「湘南ねぶた」では、花笠をかぶり、この金魚ねぶたの先頭に立って元気よく歩いていた水野さん。あれから、まだ1年も経たないというのに…。

私が水野さんと出会ったのは、今からおよそ7年前。みどり養護から瀬谷養護の大和東分教室に転勤してきた時です。一緒に分教室1期生の担任を受け持ち、分教室創成期の苦楽を共にしました。何しろ毎日のように事件が起こり、夏休みにクラスの女子生徒が本校の卒業生の男の子と長期間家出をするという事件などもありました。

そのうち3学年が揃い、分教室もだんだんと落ち着いてきて、学習発表会などにも計画的にしっかり取り組める状況になってきました。そこで水野さんと話し合っ、以前からやってみたかった影絵劇の取り組みを提案し、秋の学習発表会に向け、準備、練習を進めました。題材は私が創作した童話「桜まつりと鬼だっこ」です。村人に差別されていた鬼たちが得意の太鼓を通じて村人と融和していくというストーリーで、水野さんが描いた素晴らしい絵を入れて絵本に仕上げ、生徒たちに読んでもらいました。そして、美術の時間に、水野さん考案のカッターでの切り絵による影絵シートを制作しました。これが実に素晴らしい出来栄で、水野さんは、無理だと思っていたのに、生徒たちがかなり細かい部分まできれいに切り取ることができるようになったので驚いたと言っていました。

劇の発表方法がちょっと変わっていて、体育館のステージの前を大きな白い布製スクリーンですっぽり覆い、ステージ上からOHP3台で光を当て、真ん中で影絵シートにより物語が進行し、左右の画面ではスクリーンのそばで生徒が実際にストーリー（ナレーション）に合った演技を披露するというものでした。



分教室の生徒たちの中には、人前で演技をする、ステージに出るということに対して拒否反応がある生徒も何人かいたのですが、この手法により、そういった生徒も抵抗なく出演することができ、またお客さんが見えないので多くの生徒が緊張することなくのびのびと演技ができた様子が見られました。この風変わりな影絵劇は大好評で、PTAからのリクエストがあつて、暮れの交流フェスティバルというイベントでも再演しました。

この発表がきっかけとなって、水野さんとはその後も絵本を共作し続け、昨年は、山口県下松市の絵本コンクールで、昔の芸能民の差別問題を扱った「あかね色の道」という作品で下松市教育長賞という大きな賞をいただき、昨年夏に制作した、公害や生態系破壊などの環境問題をテーマにした「多摩川とともに」という絵本は、福島県矢祭町の絵本コンクールで入選することができました。「多摩川とともに」は、キャンバ

ス地にアクリル絵の具で描いた蛇腹式絵本で、裏が多摩川の地図になっています。裏が地図になっている絵本を作りたいという私の願いを水野さんが実現してくれたもので、完成した時は本当に感激しました。

「多摩川とともに」では、夏休みを利用して、水野さんと一緒に、多摩川の「おさかなポスト」を取材に行ったり、「おさかなポスト」主宰者で「タマゾン川」などの著書もある山崎充哲さんにもお会いして話をうかがったりもしました。あの頃、一緒にファミレスで食事をした時、水野さんが珍しく食事を残したりしていました。体調とか健康の話は全くしなかったのですが、今思えば体調はかなり悪かったのだらうと思います。ねぶたのこともあったし、体調も悪かったらうに、絵本制作のために余計な心労をかけてしまった面があったかと想像し心が痛みますが、今思うと夏じゅうに必ず仕上げようという水野さんの執念に近いものを感じたこともたしかです。

療休中、電話で山口や福島の授賞式のことを伝えた時、水野さんは行きたくて仕方がない様子でした。結局ドクターストップがかかって一緒に行くことはかないませんでした。今年に入ってから、時々会って次の絵本の打合せなどもしていましたが、2月末から全く本人からの電話が来なくなり、もう心配でたまりませんでした。水野さんがあの軽快な、元気な調子で電話をかけてきてくれることを信じて待つしかありませんでした。

奥様のお話では、最後に入院した時、家族が病気について少しでも後ろ向きなことを言うと、水野さんは「いや、絶対によくなる。悪いと言うな」と叱ったそうです。水野さん本人も、かなり早い段階から病状が厳しいことをはっきり医師から伝えられていたそうですが、このようにどのような状況でも物事をマイナスに考えず、プラスを見つけようという姿勢が本当に水野さんらしいな、すごい人だなと私は感じます。そう言えば、水野さんの口から政治家以外に他人の悪口を聞いたことは全くと言っていいほどありませんでした。プラス面を伸ばす…教師としても、とにかくそれが基本スタンスだったと思います。

今年度に入り、毎日様々な仕事に忙殺されているうちに、5月14日、亡くなる二日前に奥様から電話をいただき病院で水野さんと面会したのが私にとっては最後になりました。その時はもう意識がなく、話ができなかったのですが、こちらの話し掛けに少し反応があったので、私にはそのことがせめてもの救いとなりました。

通夜・告別式では、斎場に、水野さんの大学生の娘さんが、水野さんの自画像や絵本を並べた「水野三郎コーナー」を設営され、参列された方々に私と共作した絵本も見ていただくことができました。水野さんの描く絵は、どの絵も本当に人柄をそのまま表したように柔らかく、優しい雰囲気なのですが、線が力強く、水野さんの絵に対する思い入れや情熱が直接伝わってくるような迫力にあふれていました。

水野さんは、まさに職人的な教師として、私にとっては様々な面で学ぶところが多い先輩でした。本当に惜しい人を亡くしました。合掌。

今私は水野さんの絵本の原画や工芸・陶芸作品、教具などを集めて、ささやかでもいいから必ず個展を開催したいと考えています。

